



Title	樋口一葉後期作品の研究 : 既婚女性を主人公とした作品を中心に
Author(s)	水野, 亜紀子
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/57882">https://hdl.handle.net/11094/57882</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【19】

氏 名	みづのあきこ 水野 亜紀子
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 3 4 7 3 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 22 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	樋口一葉後期作品の研究－既婚女性を主人公とした作品を中心に－
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 出原 隆俊 (副査) 教 授 清水 康次 准教授 加藤 洋介

#### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文では、樋口一葉の後期作品の中でも既婚女性を主人公とする『軒もる月』『十三夜』『この子』『裏紫』『われから』の五作品を論じた。作品の読みが固定化されている中で、既婚女性を主人公とした作品群の新たな側面を浮かび上がらせることを試みた。

第一章では『軒もる月』を論じた。末尾近く、お袖が高笑いをする場面における「殿、我良人、我子、これや何者」という箇所は、そこだけが浮いた印象を与えている。高笑いをさせる心の働きは何か、また殿・夫・子の三者に対して高笑いをすることはどのように捉えればよいかを明らかにすべく本文を検討し、それを通して作品の主題に迫った。

第二章では『十三夜』を論じた。(下)の章における録之助の登場の意義は、録之助の人物像の独自性に求められるきらいがある。そこで、お関を中心に据えて作品を読んだ場合に、録之助との邂逅がお関にどのように影響するかという点に注意を払って、一編を読解した。録之助との邂逅はお関にとって父親に説かれた《つとめ》に新たな意味を見出すきっかけとなることを指摘した。

第三章では『この子』を論じた。一見するとごくありふれた事柄を述べるように見える本作を、本文の検討を通して捉え直した。まず、「私」が殊更に強調する我が子の可愛さが、いわゆる「母性」からくる可愛さだけではなく、子が「教へ」る存在であるという（気付き）によって、「私」は子に可愛さを見出すことになる。その点が本作にとって重要となる。さらに田辺花圃の作品を参照することで、〈自分自身で見付け出した子の可愛さ〉を語る本作が、他の作家の作品と異なる様相を呈することを明らかにした。

第四章では『裏紫』を論じた。先行論では、表現上の問題など細かな点に目が配られておらず、作品の手法が明らかにされていないうらみがあった。そこで、特に語りの特徴に注意を払い、それが作品全体にどのような効果をもたらすか考察した。〈姦通〉という題材への着目だけでは見えにくい部分を浮き彫りにすることで、(上)の章に示される作品世界をより明らかにすることを試みた。語り手の語り方によって他の人物の〈裏表〉に関する詮索が一切排除されることでお律の〈裏表〉の特殊性は浮かび上がり、割り切れない状況の中で自分を生かしていこうとするお律の姿が、いかに形象化されているかを考察した。

第五章では『われから』を論じた。美尾とお町の造形に焦点を当てる時、それぞれが妻としてどのように在るかという観点から二人を捉えた。内面描写が少ないという特徴とは裏腹に、美尾・お町の妻としての意識の問題を取り上げた作品であることを明らかにした。

第六章では、第一章から第五章までの考察の結果を踏まえて、既婚女性を主人公とした一葉後期の作品群を新たに捉えなおした。親や親代わりの人が決めた結婚を承諾したその後という題材は、他の作家の作品が因習に対して懐疑を呈するのに対し、『われから』を除く四作品は、結婚を不服と感じた本人が、何らかの形でその思いに決着をつけようと覚悟していくところを描き出す。『われから』は先の四作品と同じ問題意識のうえにありながら、それを反転させたものを描く。一葉後期の作品群は、結婚後の妻の在り方という極めて個人的で小さなテーマが扱われているようだが、困苦の中で自分を生かしていく力という人間の普遍的な生き方の問題を取り上げている。

#### 論文審査の結果の要旨

全体として、既成の論をいかに乗り越えるかに腐心し、それに成功している部分も少ない。第一章での主人公の振る舞いの分析は従来論では届かなかった所に達する可能性を秘めている。第二章なども従来論の枠を乗り越えようとする苦心のほどが伝わってくる論述である。単に発想を変えてみるということにとどまらない試みだと評価できる。第三章も予想外の視点の提示が有効に機能していると考えられる。第四章の語りの問題の論述などは、生き生きとした筆づかいが伝わってくるようで、申請者の意欲が強く伝わってくるものであり、新しい可能性を開いたといえる。第五章における問題意識も、従来にはない新鮮な切り口であり、二人の妻の相違点よりも共通性を見出そうとするのは

類例を見ないといえることができる。また、『われから』を先の四作品とは区別して捉えようとする視点も十分に評価されてよい。第六章の全体像の提示も、大枠の捉え方として、ともすれば陳腐な指摘にとどまりかねないが、その難に陥ることを免れている。

一方で、各章ごとにみると、分析が浅い箇所もあり、完成度にばらつきがある点を指摘せざるをえない。第一章では、源氏物語と関連する表現について、当時の読者とのコードの共有はどうであるかなどの視点が欠落していることが指摘されようし、〈心〉と〈胸〉という用語の使い分けなどについては、まだ分析が不十分である。第二章については、さらに反転させてあらためて(上)を読み返すことも要請されよう。第五章も論じきれしていない部分も少なくない。

そうした不十分さも含むものであるが、研究者としての今後の可能性を十分に予見させる論文となっている。よって、本論文を博士(文学)の学位にふさわしいものと認定する。